あかねが丘学園オンライン講座

神々と妖怪の地域づくり論

兵庫県立大学　自然・環境科学研究所　准教授
兵庫県立人と自然の博物館　主任研究員
高田知紀

現在の研究テーマ

- 社会的合意形成の理論と技術に関する研究

合意形成マネジメントの実践活動を展開しながら，ステークホルダーのインタレスト分析方法，話し合いのファシリテーションやコミュニケーションの手法，プロセス・マネジメントの理論などについて検討

- 市民プロジェクトのマネジメント理論に関する研究

市民が主体となった環境再生やまちづくりの活動を「プロジェクト」として適切にマネジメントするための理論を構築

- 地域の風土性をふまえた計画論に関する研究

神社の空間的配置や地名・伝承にこめられた空間の履歴を読み解き，その成果を環境保全，防災，教育，地域活性化などの具体的実践につなげていくための方法論について検討

神社とコミュニティ

- 日本の伝統的地域社会においては，神社空間は，祭祀や祭事といった信仰に関する目的のみならず，教育，防災，レクリエーション，コミュニケーションといった多様な役割を担っていた

  →地域社会の精神的支柱としての空間
- 神道は日本に固有の自然環境のなかで独自に展開してきた
- 日本の多様かつ複雑な自然環境と人間社会との関係に関するひとつの思想体系として重要な意味をもつ
- 明治時代の神社合祀で多くの神社が統合された

神社の御利益

- 日本の神社に祀られる神様は多様
- それに伴い，多様なご利益・ご神徳がある

たとえば

- 生田神社→健康長寿，合格，勝利，交通安全など
  祭神：稚日女尊
- 湊川神社→国家安泰，開運招福，厄除け，家内安全など
  祭神：楠木正成
- 綱敷天満宮→学業成就，開運招福
  祭神：菅原道真

神社の由緒に着目すること

- 人びとは，神社という空間に集い，祈り，また様々な地域活動を展開してきた
- 神社の由緒，祀られる祭神，お祭りの意味などに着目することは，その土地に生きてきた人びとの多様なインタレストの蓄積に目を向けること
- 信仰にかかわらず，古くから日本の国土に暮らす人びとが，神様を祀り，語り継いできたという事実が重要
- 神話や地域伝承を非科学的，フィクションとして切り捨てるのではなく，地域づくり，環境保全，防災などの実践に活かしていく

兵庫県・生田神社

和歌山県・田中神社

兵庫県・感神社

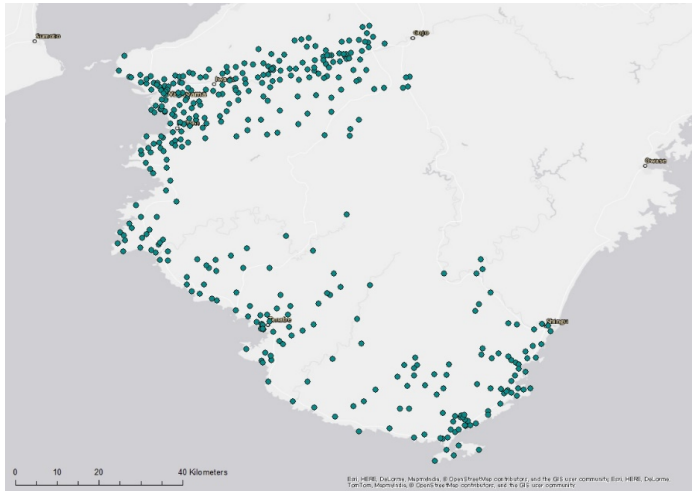
和歌山県における施設数

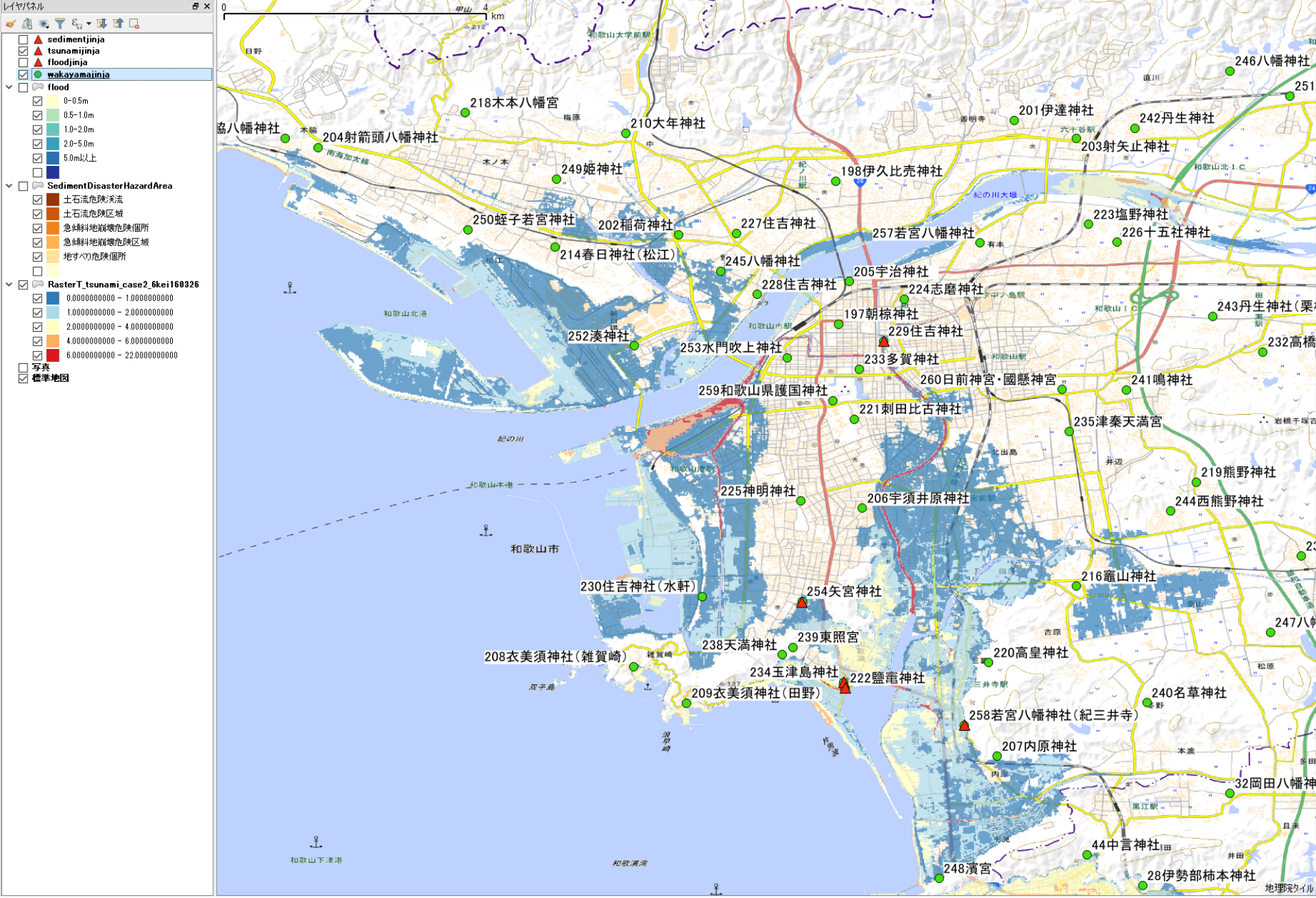
- 神社：412社(和歌山県神社庁HPより)
- 小学校：260校(2017年度調査速報)
- 中学校：131校(2017年度調査速報)
- 公民館：319館(2015年度辞典)
- コンビニエンスストア：363店舗(2017年3月時点)
- 住区基幹公園：219箇所(2015年3月時点)

神社を地域づくり活動のストックとして活かしていくことは数の点からも効果が大きいと考えられる

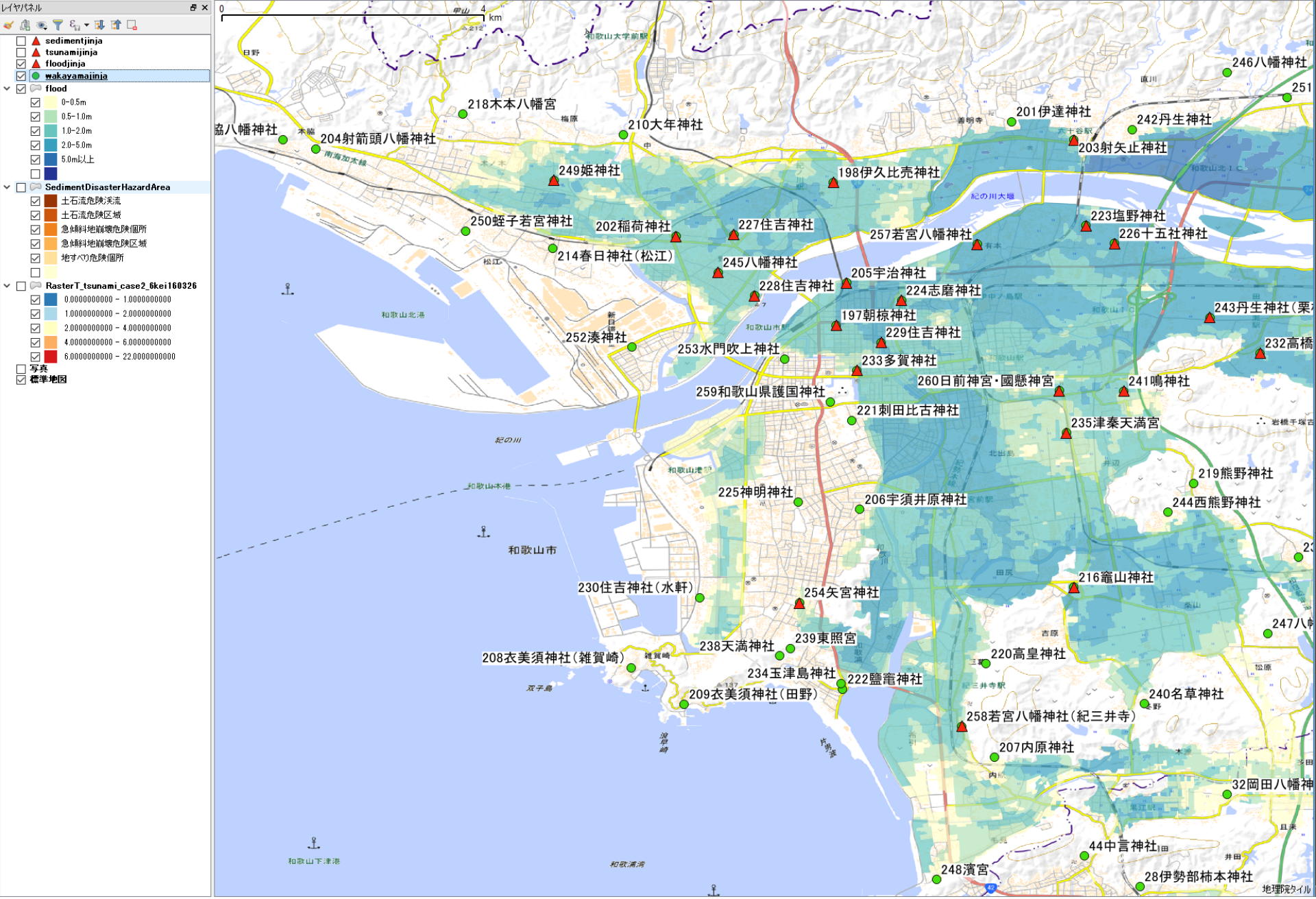
神社の被災リスクの検証

1. 神社の位置情報およびその由緒の抽出とリスト化
2. 津波，河川氾濫，土砂災害のリスクのマップ化
3. 神社の配置と災害リスクのGIS上での統合
4. 由緒と信仰的意義に着目した神社の自然災害リスクに関する考察

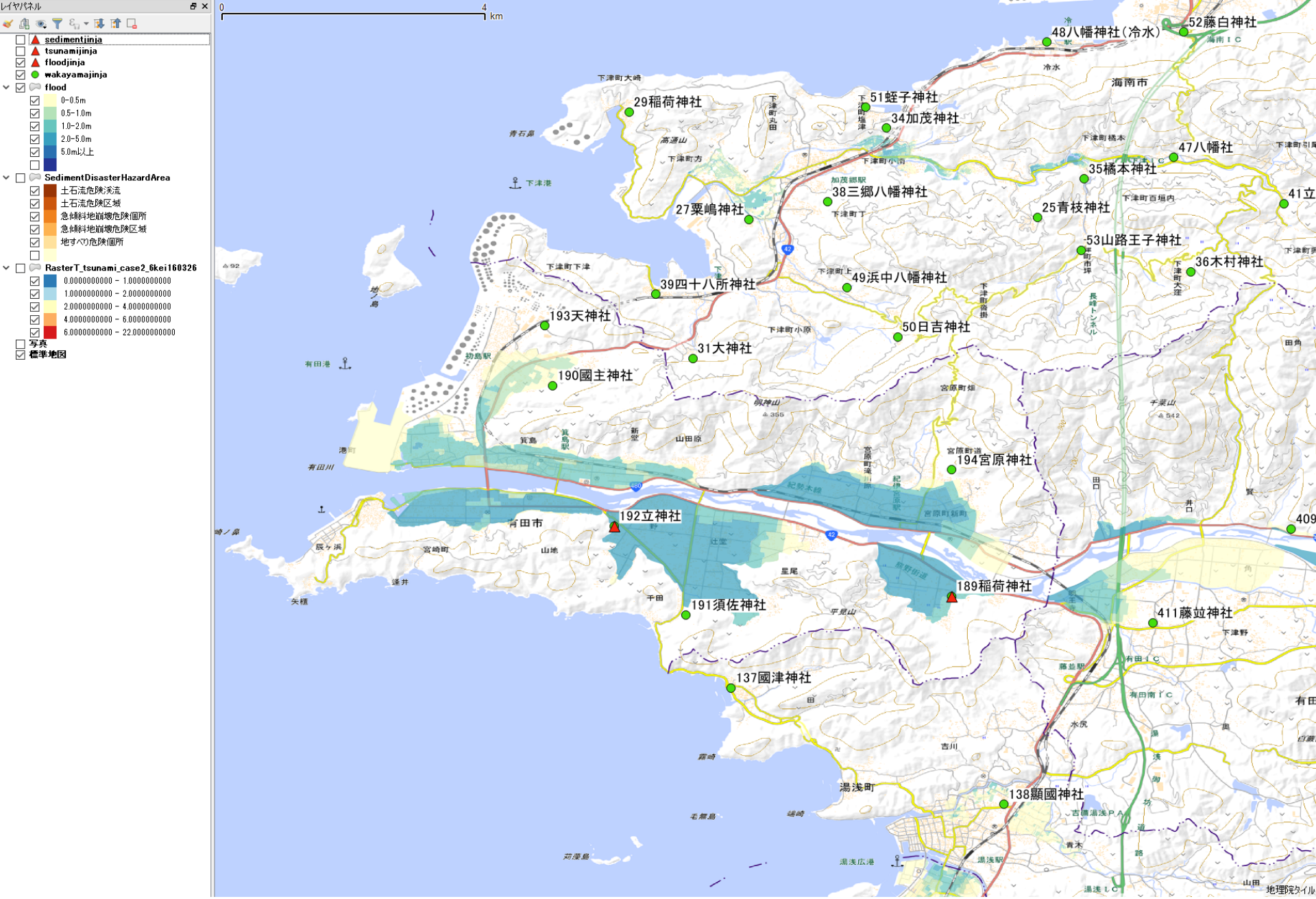




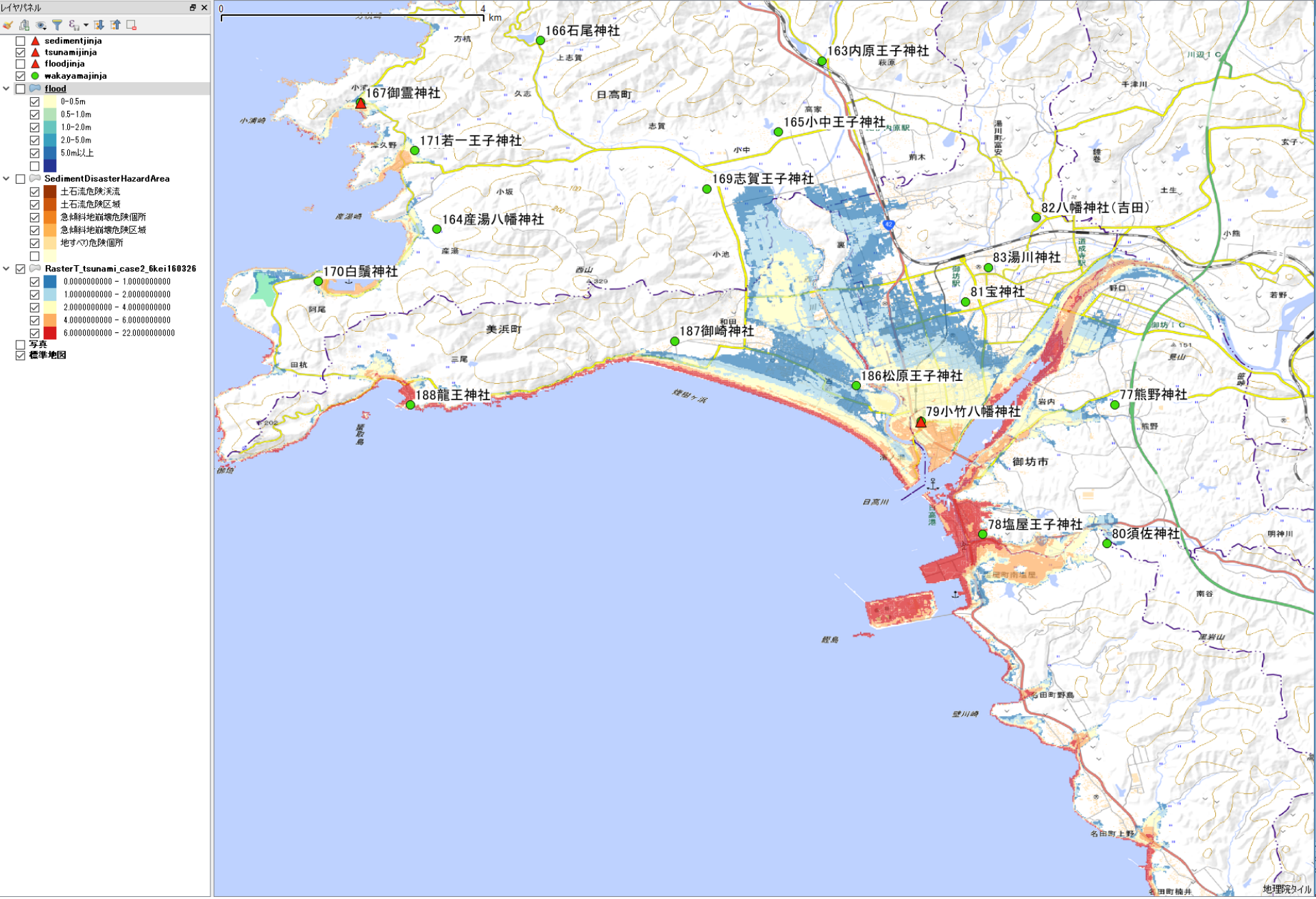
津波の災害リスクと神社の配置(紀ノ川河口付近)



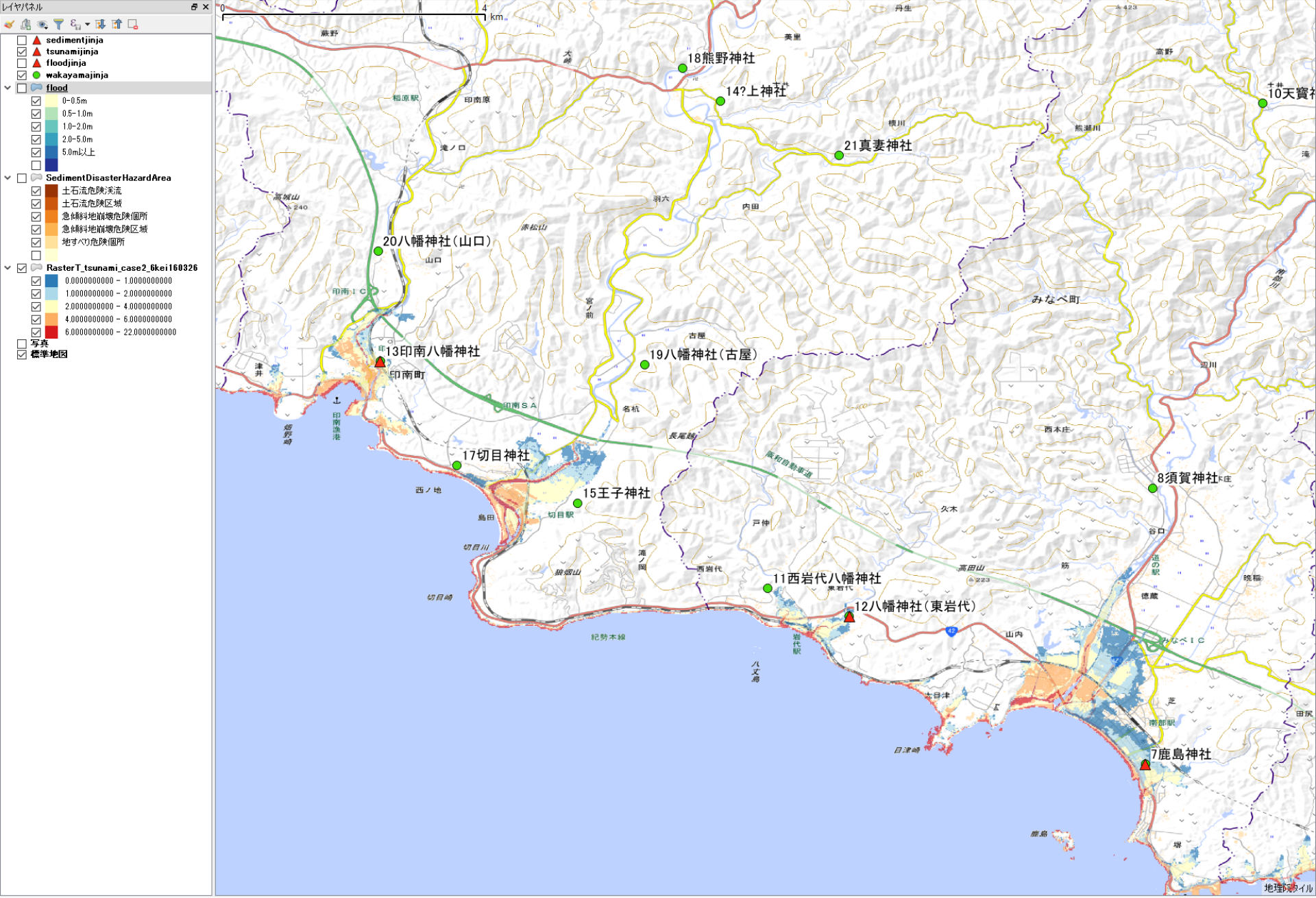
河川氾濫の災害リスクと神社の配置(紀ノ川中流付近)



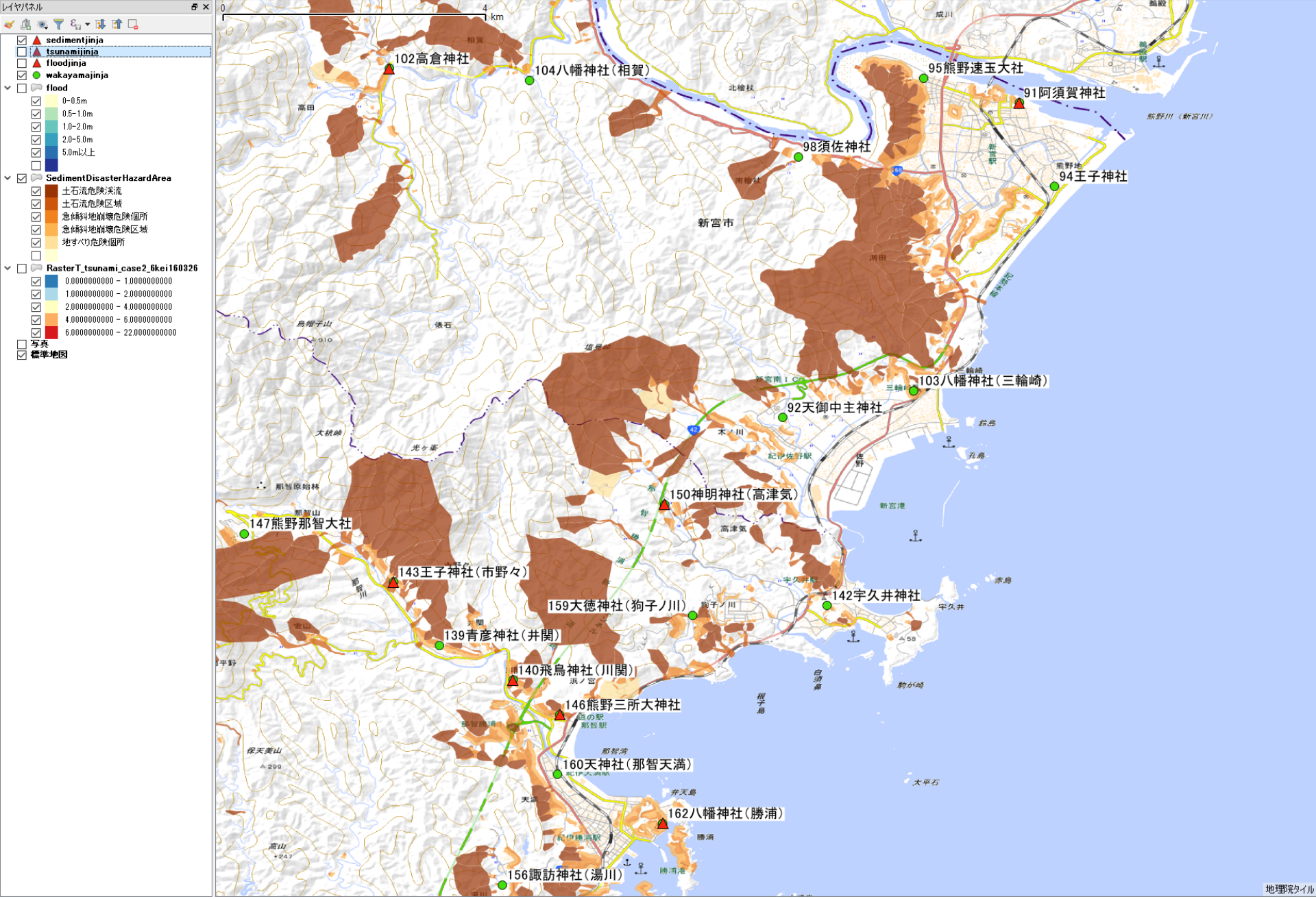
河川氾濫の災害リスクと神社の配置(有田川河口付近)



津波の災害リスクと神社の配置(御坊市付近)



津波の災害リスクと神社の配置(みなべ町付近)



土砂災害リスクと神社の配置(新宮市付近)

和歌山県における神社の災害リスク

調査対象の神社412社のうち

- 南海トラフの津波被害を免れる神社：374社(91%)
- 河川氾濫で浸水しない神社：375社(91％)
- 土砂災害危険区域外の神社：273社(66％)

水害に対しては9割以上の神社が被害を回避しうる

地域づくりにおける神社

- いかにして，神社の多様な価値や意味を再検討し，現代の防災や都市計画のなかに合理的に組み込んでいくか
- 宗教施設としての「神社」という意味だけでなく，「神社空間」として，地域で多様な価値を共有する空間として捉えられないか
- レクリエーションや地域づくりの拠点としての利活用
- 伝統的・日本的風景の重要な要素としての神社空間の位置づけとその保存・利活用方策
- お宮と鎮守の森，さらには祭事などを継続していくための新たなシステムの構築
- 神社管理の担い手，および神社の使い手の模索

神社空間の価値構造を再構築

社会実験のフィールド

伊達神社（いたてじんじゃ）

主祭神：イタケルノミコト

紀ノ川下流域に位置する式内社

地域活動における神社の位置づけについて模索

トヨタ財団研究助成プロジェクトにおいて防災拠点としての活用方策を検討

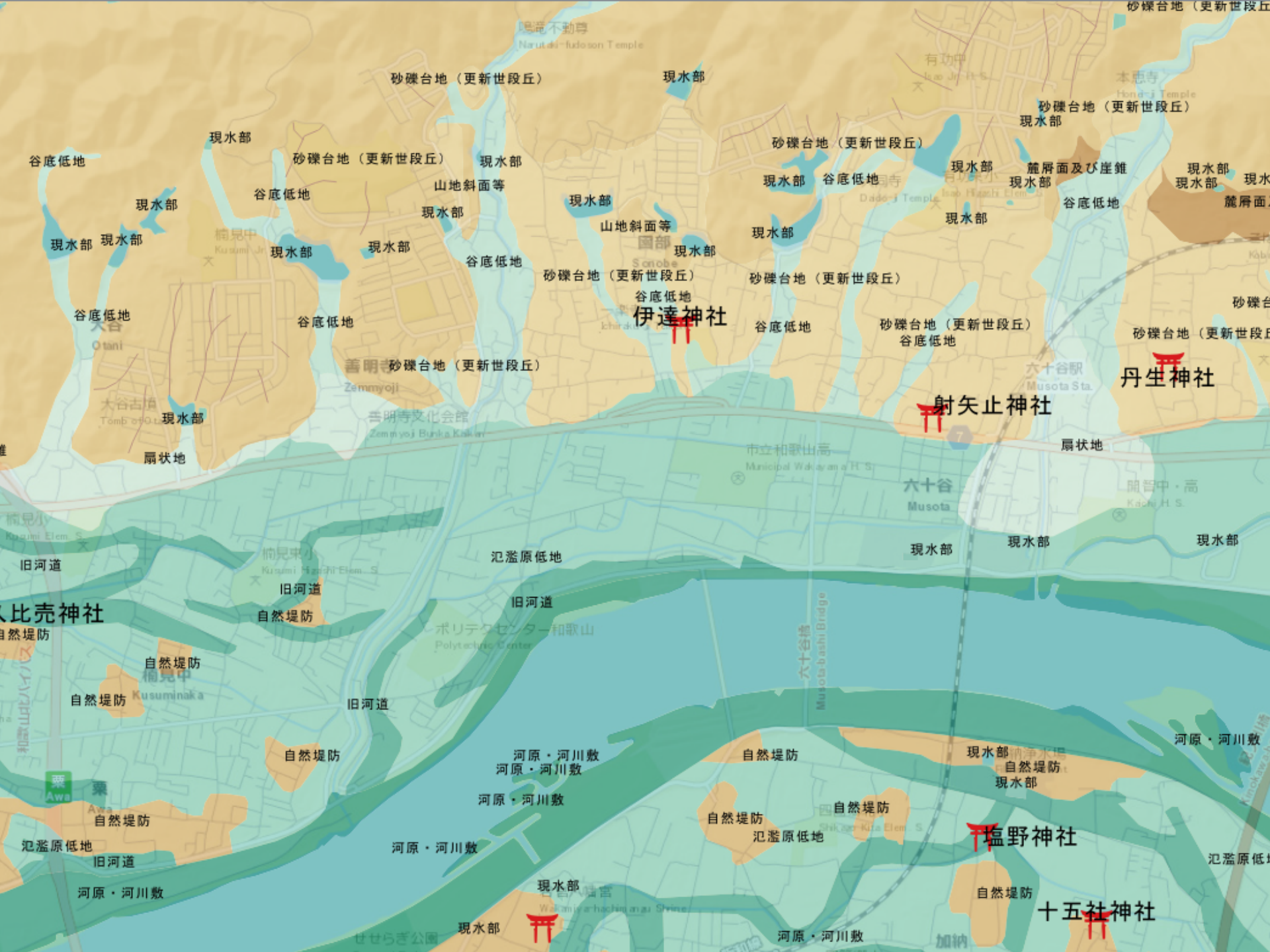
伊達神社における諸課題

- 地域の少子高齢化・過疎化による氏子の減少
- 信仰の空洞化による氏神意識の希薄化
- 広大な鎮守の森の維持管理

これらの課題を解決しなければ今後，伊達神社を持続的に維持していくことは困難

千年以上の歴史をもつ神社空間の存亡の機

伊達神社に限らず多くの地域神社も同様


伊達神社
射矢止神社
丹生神社
塩野神社
十五社神社
砂礫台地（更新世段丘）
現水部
谷底低地
山地斜面等
扇状地
氾濫原低地
旧河道
自然堤防
河原・河川敷
麓層面及び崖錐
善明寺
Zemmyoji
善明寺文化会館
Zemmyoji Bunka Kaikan
大谷
Otani
大谷古墳
Tomb of Otani
国部
Sonobe
六十谷
Musota
六十谷駅
Musota Sta.
六十谷橋
Musota-bashi Bridge
楠見中
Kusumi Jr. H. S.
楠見小
Kusumi Elem. S.
楠見中小
Kusumi Higashi Elem. S.
Kusuminaka
ポリテクセンター和歌山
Polytechnic Center
市立和歌山高
Municipal Wakayama H. S.
開智中・高
Kaichi H. S.
四箇浄水場
Shikoku Kita Elem. S.
和歌山ビッグハウス
栗
Awa
せせらき公園
加納
Kanou
Wakamiya-hachimangu Shrine
Daido-ji Temple
Isao Higashi Jr. H. S.
Isao Jr. H. S.
Honji-ji Temple
Narutaki-fudoson Temple

伊達神社における諸課題

- 地域の少子高齢化・過疎化による氏子の減少
- 信仰の空洞化による氏神意識の希薄化
- 広大な鎮守の森の維持管理

これらの課題を解決しなければ今後，伊達神社を持続的に維持していくことは困難

千年以上の歴史をもつ神社空間の存亡の機

伊達神社に限らず多くの地域神社も同様

有功地区ふるさと探検ツアー

- 伊達神社が鎮座する有功地区の様々な価値と課題について，現地を確認しながら話し合うためのワークショップを開催
- 伊達神社の氏子だけでなく，新興住宅地に住む主婦なども参加
- 有功地区の詳細な地形や環境を確認
- 災害リスクだけでなく，史跡や名所を認識する機会に

ツアーからみえてきたこと

課題

- ハザードマップに載らない局所的な災害リスク
- 新旧住民，世代間の交流不足
- 自動車社会による住民の健康不安と地形への無関心

価値

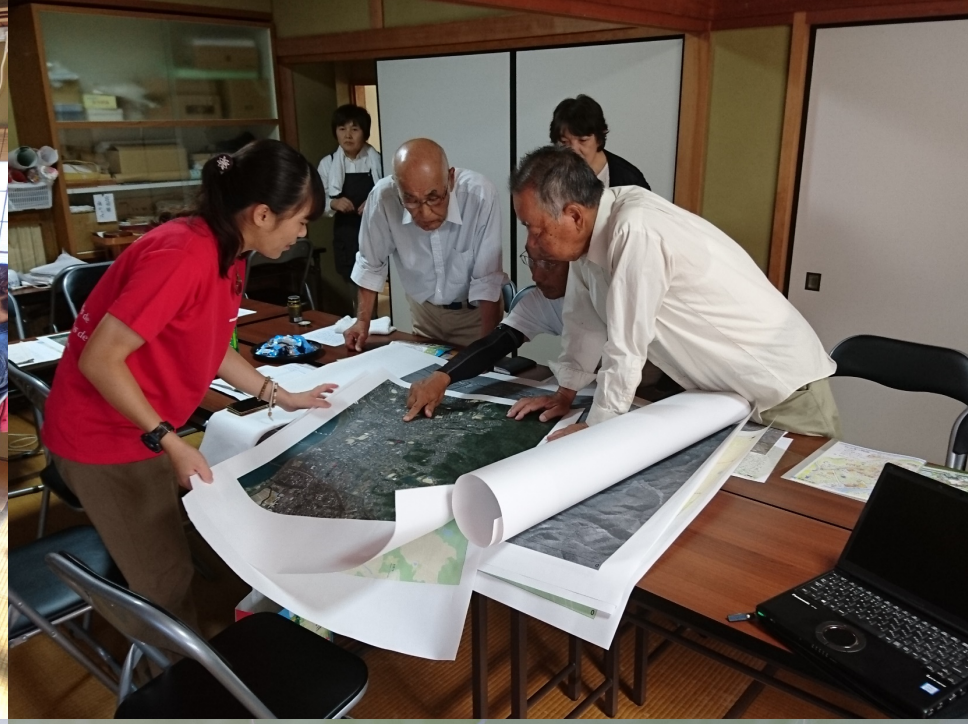
- 山側から紀ノ川を望む眺望
- 多様な史跡名所

マップづくりプロジェクト

- ふるさと探検ツアーに参加した人びとですぐに始められる
- 目に見える成果物をつくりだせる
- 多様な人びとへの波及効果が見込める

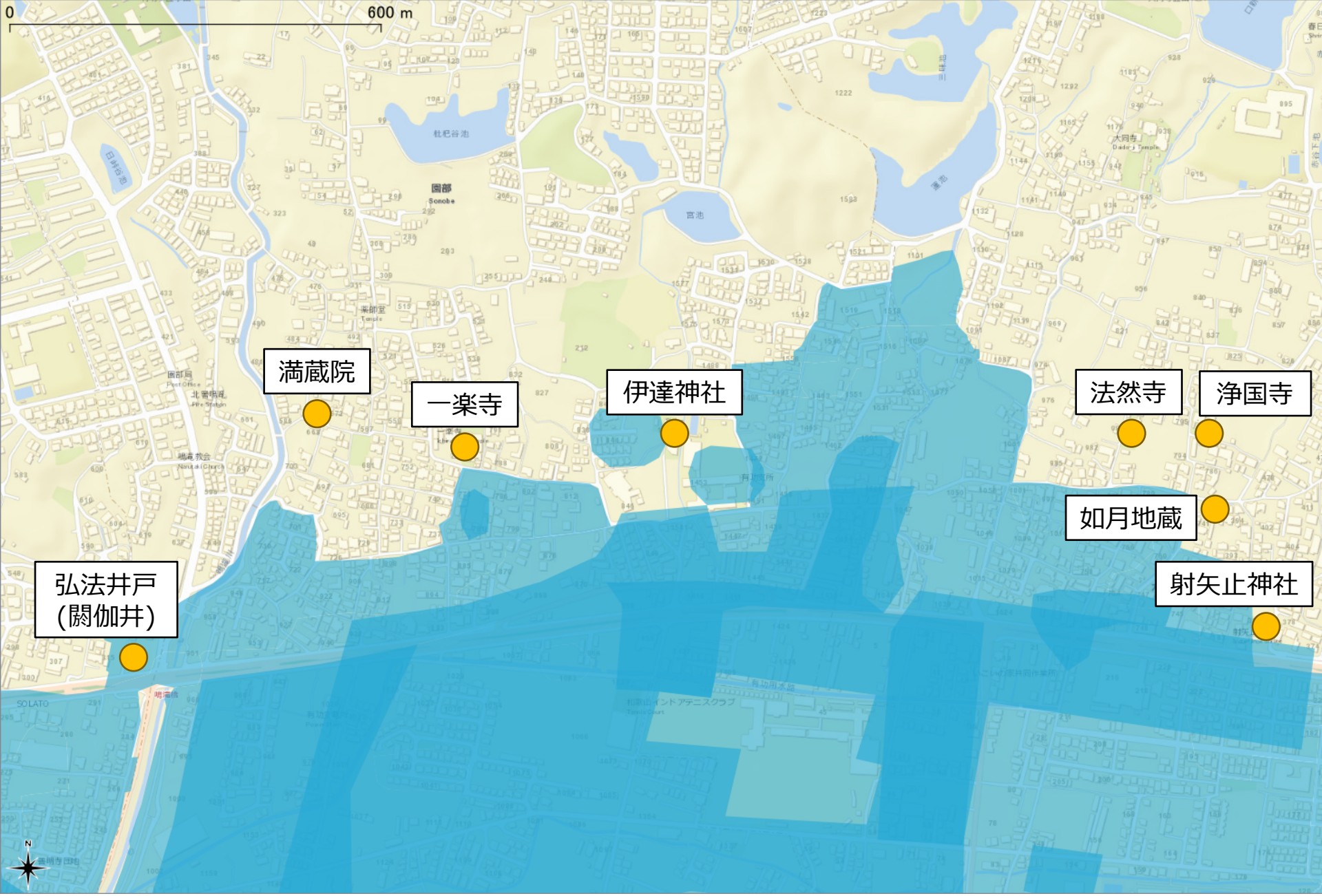
→マップづくりプロジェクトを展開

少人数かつ多様な属性のメンバーが緊密に連携・協働しながら，マップを作成するプロセスを通じて神社空間にかかわる新たな主体を形成



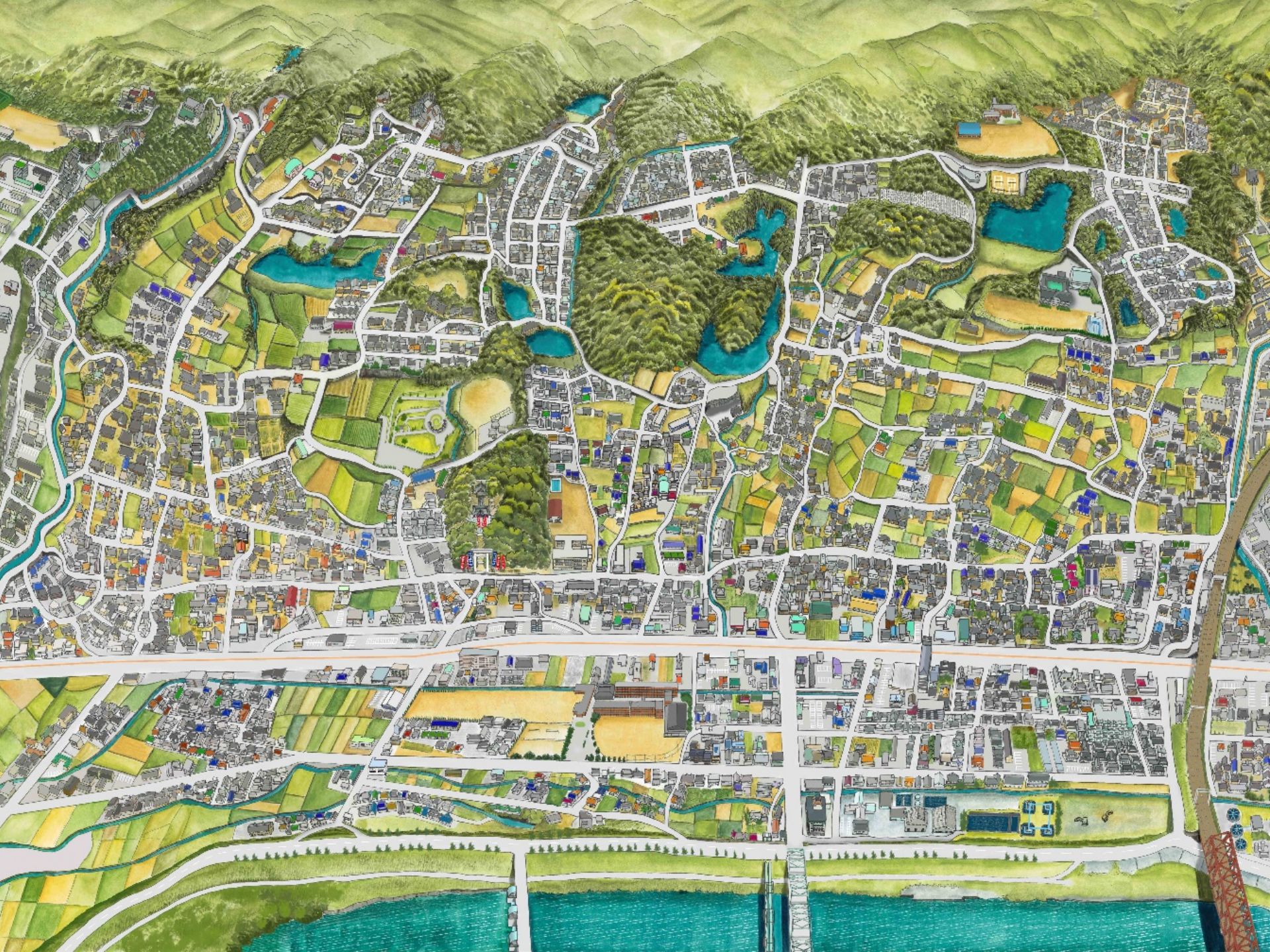
あぶないよ!
魚つり禁止
ちゃんと見て

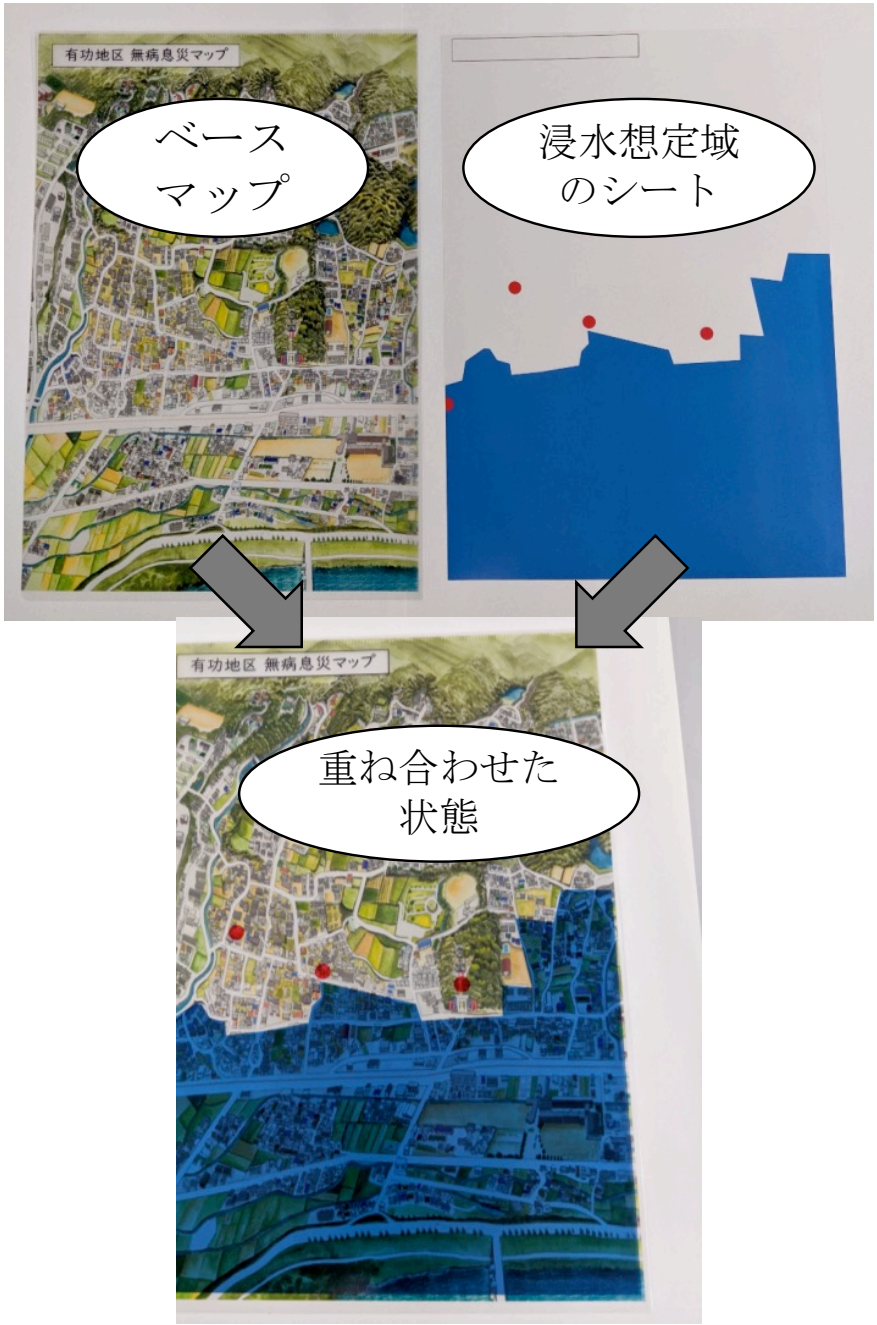
不動さん
圓明寺
地蔵寺
円山
古墳
薬師堂
一乗寺
満願院
(お堂)
伊達神社
法然寺
浄国寺
柿ノ本
地蔵
地蔵
お堂
弘法
の井
射矢止神社


0
600 m
園部
Sonobe
満蔵院
一楽寺
伊達神社
法然寺
浄国寺
如月地蔵
射矢止神社
弘法井戸
(閼伽井)
N

マップのコンセプト

- 多様な人びとが多様な用途で活用できる地図
- 楽しみながらハザード情報を認識できるようなしかけ
- 多様な立場，世代の人びとが有効に使える
- 最低限の要素をベースマップで表現し，その他の情報についてはマップの使用者が個々にカスタマイズ
- 鳥瞰による絵地図で地域の特性をデフォルメ




有功地区 無病息災マップ
ベース
マップ
浸水想定域
のシート
有功地区 無病息災マップ
重ね合わせた
状態

無病息災マップの活用可能性

「地域の人びとが地域内を歩く契機を創出」

伊達神社の周辺の神社仏閣

→紀ノ川が氾濫した際の浸水域の境界

山側の眺望点

→土砂災害リスクの高い場所

健康ウォーキングコースを歩くことで災害リスクを認識する「無病息災マップ」

妖怪を活用した地域防災

防災・減災に向けて重要な要素

- 災害時に耐えうるような国土の実現
- 避難経路やハザードマップなどの整備
- リスク発生時における人びとの行動

一方で，平常時から人びとが災害について意識を保持することは容易ではない

- 災害の前触れの認識
- 発災時における適切な行為の選択
- 次世代への災害の記憶の伝承

→ 日本の風土性のなかで「好ましくない」事象の説明装置として語られてきた「妖怪」に着目

妖怪と日本の風土性

- 妖怪文化の三つの領域(小松，2011)
- 出来事・現象としての妖怪
- 存在としての妖怪
- 造形としての妖怪

やまびこ（鳥山石燕）

- 伝統的地域社会において，人びとは不可解な事象に対する説明装置として妖怪を語ってきた
- やがて，思考の合理化によって，キャラクターとしての妖怪が広まってきた

○
天てん
狗ぐ

川太郎もの
かつて
河童

垢嘗め

妖怪伝承の場所性

- 柳田國男の理論

化け物(妖怪)は場所に現れて，幽霊は人に現れる(『妖怪談義』)

→多くの例外があり，様々な批判

一方で，多くの妖怪伝承がある一定の場所性をもって語られていることも重要なポイント

山	天狗，山姥，山爺，一つ目小僧，一本ダタラ，ダイダラボウ，ヒダルガミ，手長足長，山童，コナキ爺，モモンガ，木霊
海・川	河童，舟幽霊，海難法師，亡者船，海坊主，海女房，浪小僧，牛鬼，シバテン，橋姫，川姫，川天狗，川熊，アヤカシ，獺，人魚
里	魃，赤舌，産女，雪女，雪童子，つらら女，ジャンジャン火，ミノ火，ノビアガリ，袖引き小僧，釣瓶下し，ぬりかべ，夜行さん，ろくろ首，のっぺらぼう，一反木綿，ベトベトさん，小豆とぎ，算盤坊主，片輪車，鎌鼬，狐，狸
家屋敷	ザシキワラシ，枕返し，天井なめ，垢なめ，油坊，油赤子，火消し婆，チイチイ小袴，化け猫，土蜘蛛，大首，二口女

自然災害に関する妖怪

災害の種類	検索ワード	ヒット数	伝承の例
水害・水難	洪水	142	ヤロカ水，白髭の老人，一目連
	水害	26	龍神，大蛇，阿白蛇，巡礼娘
	鉄砲水	3	大蛇，淵の主，火の玉
	出水	5	カワロ，エンコウ
	津波	21	おな石婆さん，人魚，怪火
	海嘯	2	聖観音，稲田姫，怪光
	水難	53	河童，ガワッパ，ひょうすべ
地盤 土砂災害	地震	74	大ナマズ，児啼爺，天狗
	山崩れ	22	ヘビノフッタテ，蛟，見知らぬ小僧
	土砂崩れ	3	山うば，火の玉，大蛇
	がけ崩れ	5	カリコボウ，大男
	土石流	0	
	地すべり	1	天狗
	山津波	5	あかずの観音，大蛇

国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース(http://www.nichibun.ac.jp/youkaidb/)」で検索

自然災害に関する妖怪の要素

- 災害の誘発要因

  妖怪による(妖怪に対する)働きかけによって災害が発生する
- 災害の予兆・前兆

  ある妖怪・怪異現象の後に災害が発生する
- 災害時の状況

  妖怪存在が具体的な被害をもたらす
- 被害の回避

  妖怪存在(神秘的存在)によって人間が被害を免れる
- 災害の履歴

  過去の災害履歴を説明および継承する

妖怪あんぜんワークショップ

妖怪あんぜんワークショップ

作成した妖怪あんぜんマップ

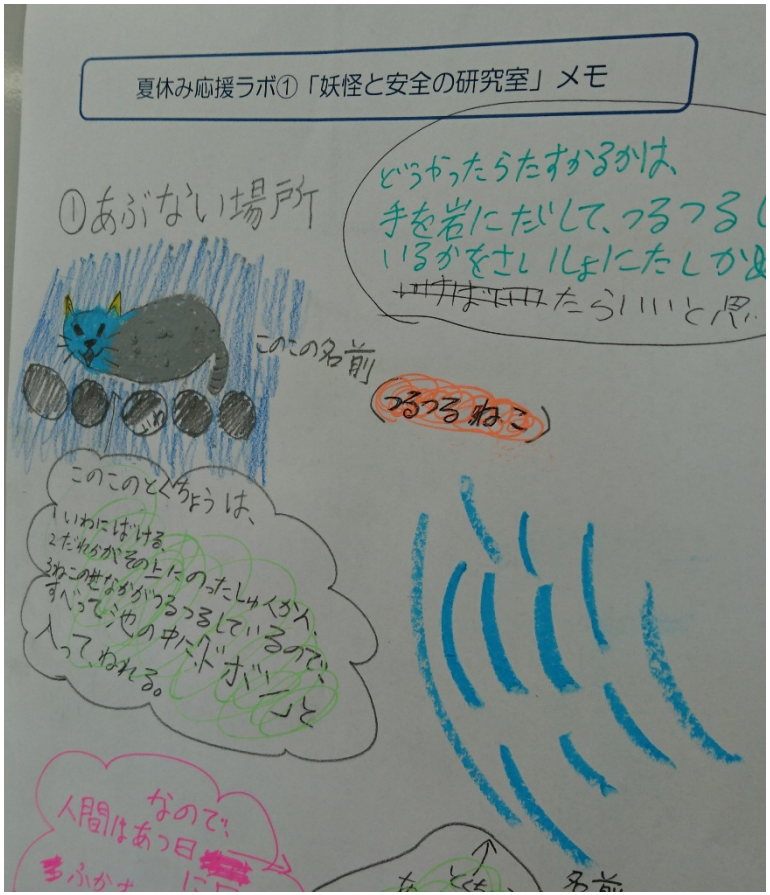
子どもたちが考えた妖怪①

名前：つるつるねこ

特徴：水路のなかの岩に化けて人が自分の上を通るのを待つ．背中がツルツルしているので，上を通った人は滑って水の中に「ドボン」

対処：手で岩を触りツルツルしているか確かめる

明石市立西部図書館



子どもたちが考えた妖怪②

名前：くさがくれ

特徴：通った人の足に巻きついて近くの池や溝に落とす．水と草がある所に生息する．

対処：巻きつかれたらハサミで切る．定期的に草を刈る．

明石市立西部図書館

子どもたちが考えた妖怪③

名前：さかへび

特徴：坂道で自転車のスピードを急に加速させる.

対処：坂道を自転車でくだる時は，止めたり，降りて押したりして，ゆっくり行く.

明石市立図書館本館

子どもたちが考えた妖怪④

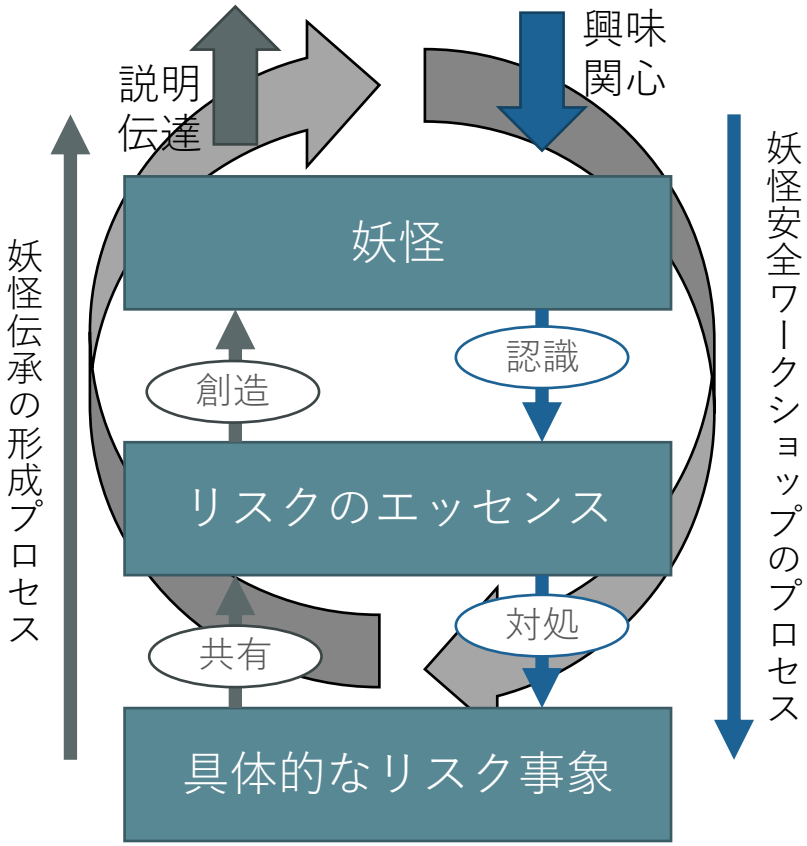
名前：バターン

特徴：地震を起こす妖怪で，塀を押し倒し，近くを歩いている人を襲う．

対処：塀がある道は，離れて歩く．地震の揺れを感じたら，塀のそばをすぐに離れる．

神戸市立筑紫が丘小学校

防災教育における
妖怪伝承の価値モデル



環境問題における妖怪の意義

- 妖怪は人びとに「わざわい」をもたらす
- 「災害」はかつては「わざわい」であった
- 「わざわい」は「わざ」が「わう(這う)」
- 「わざ」とは本来，隠れた神の力，人の力を越えた大きな力という意味
- 「わざわい」とは，人知を超えた何者かの力が広がっていく様

人びとは制御できない「わざわい」にどう対峙してきたか
「おそれ」や「不安」をどのように捉えるべきか
→奇岩をよけて通る道路，神木を剪定する前のお神酒など

「みえないもの」へのまなざし

- 日常の風景のなかに潜在しているリスクのポテンシャルをいかに認識するか
- さらにそのリスクのポテンシャルをどのようにして他者や後世に伝えていくか
- 平常時の地域空間において，リスクにとらわれすぎることなく，なおかつ潜在的リスクを「気にかけて」おくための社会装置が必要
- 平常時とリスク時をつなぐ装置としての妖怪伝承の位置づけ

「みえないものへのまなざし」をもつこと

→視覚の優位性を越えた先にある新しい風景論の構築

さんぽすることの意義

- ひとりひとりが自身の肉体とまなざしを通して，日常的風景に潜在している多様な意味や価値を見出す
- 歩きながら語り合うことで，他者のまなざしとインタレストを共有する
- 主観的認識が他者の認識や空間の履歴と融和していくプロセス

主観と客観，個人と集団，自然と社会を通観する視点

ご清聴ありがとうございました
（連絡先：takada@hitohaku.jp）